

事例1

花子さんは、新人賞を受賞するなど、今後の活躍が期待される小説家である。彼女が次に出版した作品は、架空の芸能人を主人公とする作品であった。彼女は、実在する芸能人の太郎さんを小説の主人公のモデルにしており、独自に芸能雑誌や太郎さんのブログを調べ、また、太郎さんの学生時代の友人にインタビューを行った。そして、太郎さんの日常生活や人間関係、今の配偶者との出会いから結婚までの流れなどを、小説内でこと細かに表現した。あくまでモデルにしただけなので、花子さんは太郎さんに連絡をとっていなかった。結果、小説は大絶賛。全国の書店で売り切れが多発するほど、売れ行きも良かった。

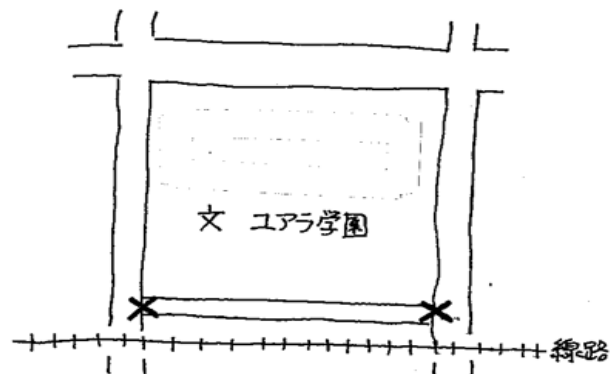
しかし喜びもつかの間、花子さんのもとに裁判所から連絡がきた。どうやら今回の小説について、太郎さんが、花子さんと出版社を相手に裁判を起こすというのだ。花子さんは、裁判で表現の自由を主張しようとしているが…。

事例2

次郎さんは、私立高校「ユアラ学園」の学園長だ。次郎さんは、線路沿いに広大な土地を所有しており、30年前からその土地に校舎やグラウンドをつくり、学園を経営している。写真の道路は次郎さんの私有地の一部だが、開校当初から、地域の住民が通れるように解放をしてきた。

私立学校の無償化制度が始まる中、次郎さんは、ユアラ学園の生徒を増やすチャンスだと考え、グラウンドの拡張と陸上部の新設を考えた。次郎さんは、この道路を封鎖し、陸上のトラックに変えようとした。

しかし、この道を長年利用してきた住民は、道路の封鎖により困ってしまった。住民は、学園を迂回しなければなくなり、交通渋滞も多発するようになった。さらには、救急車も到着が遅くなってしまった。この状況に耐えかねた住民は、ユアラ学園を相手に「封鎖を今すぐやめてほしい」と、訴訟を起こした。



事例3

三郎さんはA町で温泉施設を経営している。見晴らしがよく、地元の人だけでなく、旅行でこの町を訪れる人にも人気の温泉施設だ。また、A町には食品加工場が多く、外国人労働者も多い。温泉施設を利用するお客さんの中には、外国人労働者も多くいる。

しかし、外国人労働者のうちの一部は、土足で入店する、浴室にお酒を持ち込み飲酒する、大声で騒ぐ、石けんをつけたまま入浴する、お湯に飛び込むなど、マナーの悪さが目立つ。他の利用者からのクレームも増え、お客の減りも心配されている。マナーの悪い外国人たちに注意しても、言葉が通じない。そこで三郎さんは、「外国人は入店お断り」というお店のルールを決めた。

旅行でA町に訪れていたマイケルさんは、この温泉を楽しみにしていた。しかし、外国人だからという理由で、入店を断られてしまった。そこでマイケルさんは「これは差別ではないか」と三郎さんに主張した。

事例 4

四郎さんと鳥子さんは、2年前に結婚した夫婦である。2人は同じ年で、共に35歳。もうすぐ2人の子どもの出産日。2人とも初めてのパパ、ママになるので、期待と不安な思いを抱えている。

四郎さんは、自分が勤めるB社に育児休暇の申請を出そうと考えている。しかし、B社では、新商品の開発が進んでおり、彼はその責任者である。また、彼はこの春から入社した新人3名の教育係でもある。仕事を引き継げそうな同期や先輩は数名いるが、それぞれが大きな仕事を抱えていて頼みづらい。休暇をとったら、その後の昇進も心配だ。

一方、鳥子さんは、四郎さんと結婚する前に、子どもの頃から夢だったカフェを開き、現在も経営をしている。店員はアルバイトの大学生1名のみ。産休の間、3カ月は一時休業をする予定だが、育児休暇までとってしまうと、経営不振でカフェは閉店になってしまう。どうしよう……。

事例 5

五郎さんは、第一志望で考えていた公立のC高校を受験し、学習評定および学力検査で、受験者全体の上位10パーセントに入る好成績だった。しかし、彼はC高校から不合格が伝えられた。

五郎さんは「筋ジストロフィー※」という進行性のある難病をかかえ、中学校では車イスで生活していた。病院からは「定期的な検査が必要だが、高校に通うのは可能」と診断されていた。中学校から送られる調査書にも、そのことが分かるように記載をしていた。

しかし、C高校は、五郎さんが生活する上での設備や人員が整っておらず、五郎さんが3年間通学を続けることは難しいと判断し、不合格と決めた。五郎さんは、不合格の取り消しを求めて、裁判を起こした。

※筋ジストロフィー：

筋力の低下により、身体を動かす、呼吸や飲み込むといった生活全般に障害が出る。薬の開発が進められているが、根本的に治す方法は見つかっていない。

事例 6

風子さんと月子さんは隣に住んでいる専業主婦で、ママ友だ。風子さんには3歳になる息子の六郎さんが、月子さんには4歳になる息子の七郎さんがいる。六郎さんと七郎さんは大の仲良しである。

ある日、月子さん親子は風子さんの家にお邪魔させてもらっていた。月子さんが買い物に行くために七郎さんを連れて行こうとすると、七郎さんは「まだ遊んでいたい」と言い始めた。風子さんも「せっかくなので、七郎くんはもう少しうちで預かりますよ。月子さんは買い物に行ってください」と提案した。月子さんは、風子さんに七郎さんを預けて買い物に出かけた。

風子さんは、六郎さんと七郎さんに「家の隣の空き地のお池には近づかないでね」と伝えた。風子さんの家の横には、市の管理する用水池がある。長年整備されておらず、誰でも近づける状態になっていた。

風子さんは時々2人の様子を見ながら掃除を始めた。しかし、ふと目をはなした隙に、六郎さんと七郎さんの姿が見えなくなっていた。しばらく家の中で2人を捜していると、外から六郎さんの泣き声が聞こえてきた。慌てて隣の池を見に行くと、七郎さんが池でおぼれているのを発見した。急いで助け、救急車を呼ぶも、搬送先で七郎さんの死亡が確認された。七郎さんの母の月子さんが病院に到着したのはその直後であった。

事例 7

2020 年春、新型コロナウイルスという未知なる感染症が日本にも広がり始めた。外国から日本に帰国した人が陽性だったニュースを見た九郎さんは、職場の人に「こんな時期に日本に戻ってくるなんて、迷惑な人だね」と言われ、「確かに」と答えた。

2020 年夏、九郎さんは病気の祖母に会うため、感染対策を万全に行い、東京に出かけた。地元に戻ってきて何日か経った頃、九郎さんは体調に異変を感じ、病院にかかった。診断結果は陰性で、ただの風邪だった。

しかし、九郎さんが数日家を空けていたこと、その後病院にかかったことを近所に知られていて、九郎さんの家の前に「コロナを広めた犯人」と書かれた貼紙がされていた。その後も、近所の人から無視をされたり、無言電話が家にかかってきたりした。職場にも苦情が寄せられた。最終的に、九郎さんは仕事を辞め、引越しを余儀なくされることになった。彼の実家も、同じように被害を受けていた。